

ケア・インターナショナルの

活動から見る貧困問題

第2回

二〇二〇（令和二）年一月二十八日に「ケア・インターナショナルの活動から見る貧困問題」というテーマで研究会を開催しました。講師としてケア・インターナショナルジャパン理事長・日賀田周一郎先生、事務局長・池田卓生先生を招聘し、総合研究所研究員や重点プロジェクト推進室職員が参加しました。

前号に引き続き、「ケア・インターナショナルジャパン」の取り組みについてご紹介します。前号にご紹介しました方針に基づき、「ケア・インターナショナルジャパン」ではさまざまな援助活動をおこなってまいります。今号では、その活動内容の一部について具体的にみていきたいと思います。

1. 「ケア・インターナショナルジャパン」の活動事業について

■東ティモール「学習教材『ラファエック』事業」
東ティモールの支援にしましては、われわれは力を入れて二つの開発事業を何年も行ってきました。東ティモールは二〇〇二年にインドネシアの保護占領下から独立した、東アジアで一番新しい国ですが、同時に一番貧しい国でもあります。人口が約一二〇万人で、国の大きさはだいたい岩手県くらい。一二〇万人のうち十四歳以下が約四十%を占めますので、戦争が終わり、やっと今平和を享受しているということだと思います。ただし、国としての教育システムがまだしっかりしていない。そして、教育にかける国の予算もほとんどない。さらに、生きる力も、国としても人々にも、まだ培われていない中で支援をしております。

東ティモールは独立したばかりの国で



すので、幼稚園教育から高等教育まで一貫したシステムが確立しておらず、また教科書も白黒の電話帳みたいな冊子で、子どもたちが興味を持つとは言いがたいものです。また独立後、多くの先生たちがインドネシアに帰ってしまったりする

いていません。こうした現状に鑑み、ケア・インターナショナルジャパン（以下、ケア・ジャパン）としては、東ティモールの教育に少しでも役立つような支援を行っています。

具体的には、小学四年生くらいまでの子どもたちに、カラーの写真付きの学習補助雑誌を作成、配布して

ります。東ティモールは四百年間、ポルトガルの植民地でしたので、高齢世帯はポルトガル語を話しますが、中間層はインドネシア語を話します。ただ、現地の共通言語はテトゥン語です。しかし、現地にはテトゥン語の教科書はなく、ポルトガル語の教科書しかありません。

そこで、われわれは現地の教育省と組み、内容も事前にチェックしてもらったうえで、

『ラファエック』（現地で神格化されているワニの意）というテトゥン語の学習補助雑誌をつくりました。これをまず四年生まで配り、さらに先生も同時に育てていかなくはいけないということで、先生用の雑誌もつくっております。

また子どもたちが学校に行きたい気持ちがあっても、保護者の方に快く送り出してもらわないと意味がありません。教育を家や村落での家事労働に優先してもらわなくてはいけないわけです。そこで、教育の重要性をわかってもらうために、コミュニケーション用の雑誌もつくりました。つまり、子ども用、先生用、コミュニケーション用（保護者用）の三種の雑誌をつくり、五年間の『ラファエック』の事業が終わったばかりですが、新たに三年間の事業を継続する予定であります。

■ガーナ「乳幼児の栄養改善事業」

株式会社「味の素」さんとは十年ほど、



ことを目的とした栄養改善事業として、ガーナ北部の非常に貧しい地域を支援対象としたものです。

こちらもやはり、対象は子どもが中心です。味の素さんの研究成果により、母体の中を含め千日間、つまり最初の三年間（二歳まで）で、いかに栄養を摂取したかが、その後の成長に大きく影響するということがわかりました。

当然、途上国では栄養摂取がままならないので、味の素さんのイニシアチブで、現地のメーカーとも連携し、ガーナ産の大豆を主原料にした栄養サプリメントをつくりました。

最初は赤字覚悟で売ります。一袋十円程度の商品ですが、現地の人たちにとってはそれでも高いのです。

そこで、副収入を得てそのお金の一部で買ってもらうということになり、女性の起業家を育てることも同時に実施し

ました。サプリメントだけではなく、自分たちの家で作ったものなども売って、そこから副収入を得ることで経済的にも自立してもらおうというわけです。

これはどの国でも言えることなのですが、父親より母親が副収入を得た方が、子どものために使う率が非常に高いようです。ですから、母親の副収入が子どものために使われるという構図を意識しました。ガーナという国は、男性がいろいろ決める力を持っています。母親が稼いだお金でも、子どものために使うかどうかというのは、男性が決めることが多いようです。

自分の収入でも子どものためには使わせないと言われたら困るので、男性の意識改革も始めなくてはいけません。ただ、男性の中には、女性にそう言われてもプライドや慣習があるので、なかなか態度を変えてくれない人もいます。そこで彼らの中から男性指導員を選び、男性

ガーナ（西アフリカ）において「乳幼児の栄養改善事業」をしてまいりました。当初、味の素設立百周年にあたり、貧しい人たちのためになる事業を始め、それがいずれ彼らの収入にもつながるとい

グループ内で意識を徐々に変えていくということを目指しました。最初グループ内十名全員が、消極的な態度でしたが、その中の一人が変わると、劇的に変化していく。その男性が「私の妻が喜んでいたらよ」と伝えると、周りの男性たちは「そうなの？」と意識を変えていくのです。

男性の意識が変わり、女性の経済力も高めていくことによって、間接的にはありますが、子どもたちの栄養状態も改善されていきました。

■タイ「理数系教育を通じた

リーダーシップ育成事業」

こちらは、同じ子どもを対象としているとは言いながら、ケア・ジャパンには珍しく、中学生、高校生という思春期の子どもたちを対象とした事業です。日産自動車さんの現地工場が近くにある地域も含み、日産自動車さんがスポンサーと

なり、タイ日産の従業員の方々も理数系の教育に関わってくださいている事業です。

貧困という意味では、タイにももちろん貧しい地域はありますが、他の途上国と比べてそこまで貧しくはありません。ただ、私たちがこの事業をしてみてもよかったと思うのは、現地の子どもたちが、非常に喜んでくれることです。今までの事業はだいたい、女性や女子たちの自立や貧困をなくすということが前面に出ていました。ただ、現地の人たちが、本当に中長期的に幸せなのかどうかというのは、まだ結論を出せない部分もあるわけです。ところが、この事業は子どもたちが近い将来何をやりたいかというところに主眼を置いています。子どもたちが自分たちで考え導いて作った事業ともいえます。それを放課後などに課外授業や部活のような形で行っています。子どもたちが、卒業後どういったことをし



たいか。こういった職業があつて、将来何に就きたいのか。そのためには何が必要か。バザーをするんだつたら、何が売れるか。材料は誰から調達して、誰に助けてもらう必要があるか。全部、自分たちで考え、責任をもつて最後まで達成するんです。当然、みな生き生きとしているし、それを見た学校の先生や保護者の方々、地域の大人たちもボランティアで手伝ってくれるようになっていきます。

2. SDGsとの関係について

具体的な事業のご説明は、これくらいにしますが、個々の事業は多くの場合、われわれケア・ジャパンが事業責任者として遂行します。もちろん、ドナーである外務省や味の素さん、もしくは日産自動車さんなどの意向を尊重しながらですが、事業の準備段階からこういった事業をどの地域で行い、支援対象者や達成す

べきゴールは何なのかを、われわれが責任を持って組み立てていくというのが、他の団体との1つの違いかと思えます。

また、国連の主導する「SDGs」(持続可能な開発目標)は十七の目標を掲げていますが、私たちのミッションは「貧困削減」ですし、フォーカスも「女性」ですので、目標1番(貧困をなくそう)や目標5番(ジェンダー平等を実現しよう)が非常に大事となります。ケア・インターナショナル全体としては、二〇一五年から二〇一八年までの四年間で、世界中で千六百万人近くの人たちに、何かしらのSDGsの貢献をしました。この中で、実は貧困やジェンダーよりも、もっと人数的なインパクトが大きかったのが、目標3番の「すべての人に健康と福祉を」でした。本当に栄養摂取が全く足りていない地域もまだまだありますので、大きな問題となっています。

また、目標11番の「住み続けられるま

ちづくりを」も重要なゴールの一つです。難民化したり自然災害等で自分の住居に住めなくなったりした方々を支援してきました。こういったところには、実際一千万人以上の人々に対してSDGsとしての貢献をしております。

緊急支援を届けなくてはいけないのは、実は非常に憂慮すべきことなのですが、そういった支援がないと生きていけない人たちが世界中に多いのも現実です。われわれのDNAといえますが、最初の活動の出発点は、戦後の緊急支援から始まっておりますので、その分野も重視して今後も世界的に活動が続けていく所存です。

世界各国には開発支援や緊急支援などが必要なさまざまな地域や問題があることがご理解いただけたのではないでしようか。今この瞬間にも支援がないと生きていけない人たちがいるという事実を多くの方々に知っていただき、われわれの

活動にもご賛同、ご協力をいただけるのであれば幸いです。

3. 研究所所感

今回は、具体的な活動をご紹介いただきました。一つ目は、東ティモールでの学習補助雑誌事業です。子どもの未来にとって、教育は言うまでもなく重要な活動です。ただ教科書が有れば良いのではなく、カラーで地元の言葉で作られた資料を作るといふ濃やかさに興味を惹かれました。前回もそうでしたが、現場で何が必要とされているかの調査が行き届いているのがケア・ジャパンの活動の特徴と言えるでしょう。

続いて、ガーナとタイの支援活動についてお聞きしました。ガーナは味の素さん、タイは日産自動車さんと協力しての活動となっています。味の素さんの場合は、栄養に関する研究成果を活かした活

動です。このように、多様な組織が、それぞれの得意な分野を活かして、協力しながら活動するという点は、大きな学びでした。宗派として単独の活動を行うのも良いのですが、様々な実践例を学び、協力できる場所や仲間を探すことも大事であると思われました。

また私たちは普段、つつい国内のことばかりに目を向けがちです。私は時々、BBCラジオ（英国国営放送）を聞くのですが、思いのほか、英国以外のニュースが多いと感じます。今回のお話をお聞きして、国外で起きている問題にもっと注意を向けることが必要であると感じられました。

宗門は、現在、重点プロジェクトの実践目標として「貧困の克服に向けて」Dana for World Peace（子どもたちを育むために）を掲げ、「国内外の子どもたちへの支援活動」を推進しています。特に、その一環として「子どもたちの笑

顔のために募金」が立ち上がっており、具体的な支援を皆さまにご協力いただいているところ です。これら、子どもたちへの支援活動を実りある活動としていくために、子どもに関わる問題について引き続き学びの機会を設けていきたいと考えております。

（浄土真宗本願寺派総合研究所
副所長 藤丸智雄）

※追記

ケア・インターナショナルジャパンでは、これまでのエボラ出血熱や重症急性呼吸器症候群（SARS）、コレラなどの感染症への対応経験を活かして、現在、「新型コロナウイルス感染症緊急支援」募金を行っております。詳細につきましては、以下URLをご参照ください。

http://www.careinjap.org/news/covid19_bokinh.html